滋賀文化財だより
No.289
2004.1.30
●編集発行／財団法人滋賀県文化財保護協会

312. 歴史に見る湖東流紋岩

1. 湖東流紋岩

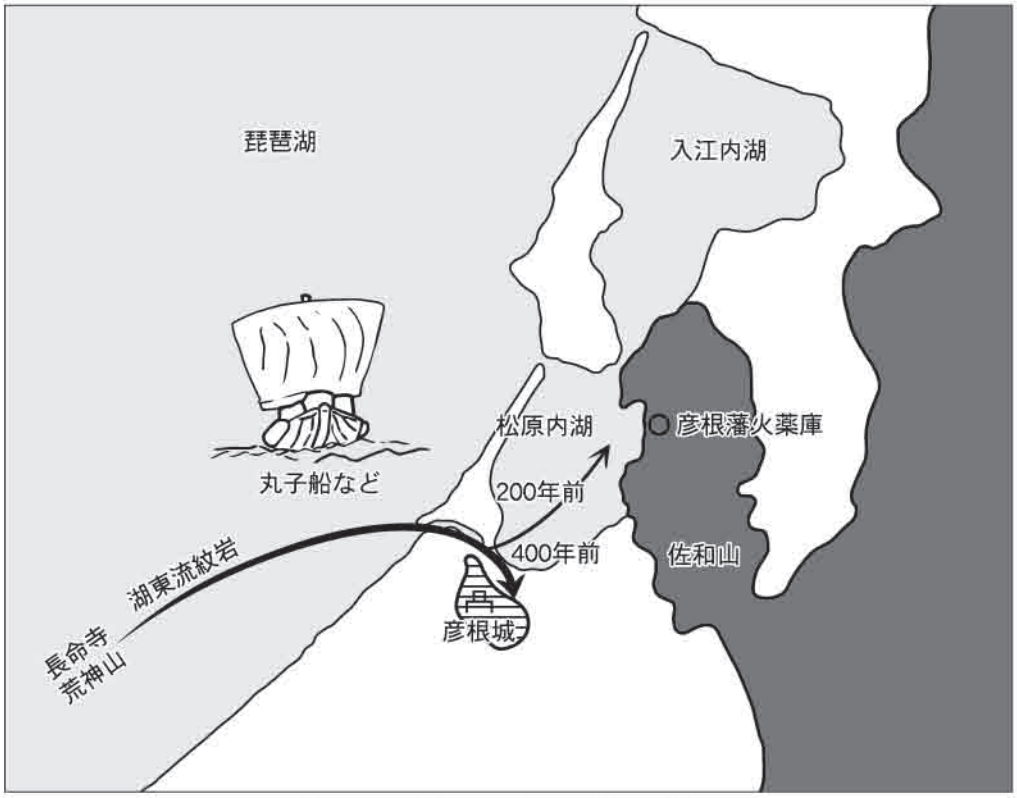
織田信長が築いた安土城は最初の本格的な石造りの城として有名です。見上げるようなその石垣は野面積みと呼ばれる石の自然面を生かして石垣を築いていた技術を用いて築いたとされています。この石垣に使われている石は「湖東流紋岩」と呼ばれ、滋賀県の湖東地方でよく見られる普通の石です。普通の石なのですが、この石はさまざまに利用され、歴史のあちこちに顔を出しています。そこでこの「湖東流紋岩」を考古学の見方から覗いてみましょう。

湖東流紋岩は一見すると花崗岩に良く似ています。岩石学上では湖東平野に分布している流紋岩・花崗斑岩・石英斑岩・溶結凝灰岩などを指しており、総称して「湖東流紋岩類」と呼んでいます。安土山や長命寺山を中心に北は多賀町青龍山・彦根市荒神山、南は竜王町雪野山あたりが分布範囲となります。

近江八幡の鶴翼山や沖島では最近まで湖東流紋岩が切り出されており、石屋さんによるとその石の品質は「花崗岩の灯篭は千年もつが湖東流紋岩は優に二千年もつ」と言う強靭なものなのだそうです。それぞれの産出場所でその表情や品質が少しずつ異なりますが、石はネズミ色をしているものが多いです。しかし、風化した表面は白く変色しており、石垣などは全体に白っぽく見えます。

2. 城の石

近江八幡市の長命寺の湖岸は、岩礁湖岸となっています。この石が湖東流紋岩です。湖岸には大きな石の塊がたくさん転がっていて、よく見ると六面体、つまりサイコロのような形をした石が多く見られます。花崗岩に比べて平らな面を持った四角い石が多いのです。鈍角が少なく、平滑な面を多く持った湖東流紋岩は石垣に築きやすく、また築かれた石垣は平滑で美しく、石垣には最も適した石だったのです。



第１図　彦根に運ばれた湖東流紋岩

安土の山も湖東流紋岩の山です。信長はこの湖東流紋岩を見て高い石垣で城を築くことを思い立ったのかも知れません。

関ヶ原の戦いの後、築かれた彦根城はどうでしょう。彦根城が築かれた彦根山はチャートという石の山です。チャートは硬い石なのですが、表面に凸凹が多く、しかも彦根城の山のチャートは全体に細かいヒビが入り、大きな岩塊でも、もろく崩れ易い質のものなのです。ですから彦根城の石垣にはチャートは使われておりません。すべて湖東流紋岩で築かれているのです。彦根城の石垣は安土城の何倍もの規模の大きなものです。築くには膨大な量の石材が使われています。そのすべてがよその山から運び込まれて来たものなのです。水運を使って彦根市の荒神山や近江八幡市の沖島・長命寺などから運ばれたのでしょう。彦根城の石垣を作るために、いかに多くの石が運び込まれてきたかは、彦根城を目の前にすると想像できることでしょう。

3．火薬庫の石

彦根城の火薬庫の発掘調査を2001年から2002年にかけておこないました。彦根城から北に２㎞のところの佐和山の西麓に築かれていた江戸時代後期の火薬庫です。建物はすでに崩れ去り無くなっていました。調査を進めていくと、チャートの礫中に湖東流紋岩が含まれていることに気がつきました。小さな石だったのですが、これがもとで火薬庫の建物や武家屋敷の建物を検出することができました。建物の基礎に湖東流紋岩が使われていたのです。

幕末、彦根藩は日本近海に多く出没するようになった外国船のため、江戸近郊の海岸線の警備役を承ります。砲台の建設や兵員の派遣などのほか、藩内で洋式大砲の鋳造や火薬の製造もおこなっています。調査したところはその火薬を製造し、貯蔵するために作られた施設です。ただ、彦根藩はこれらの兵力増強に多大な出費を強いられます。お城を築いたときと同じように、膨大の費用と人員を注ぎ込んでまで火薬庫を築く力は彦根藩には無かったのでしょう。火薬庫の施設には石垣は築かれていません。ただ、格式を必要とする門周りの階段や袖、そして見栄えのする土蔵の基礎の外面などだけに湖東流紋岩が使われています。ここには建築材として湖東流紋岩が高く評価されていたことを見ることができるのです。

4．古墳の石

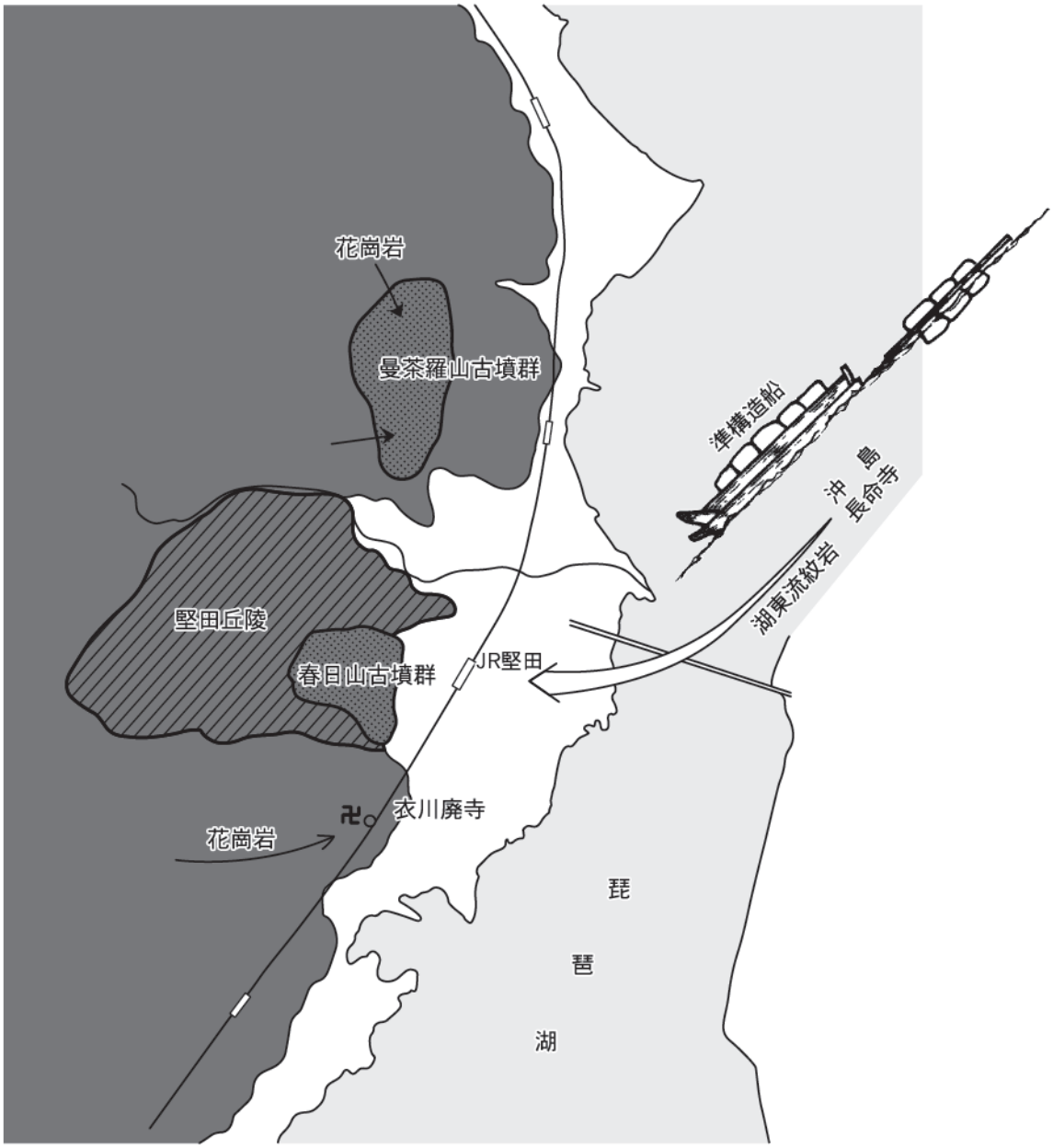
ＪＲ湖西線堅田駅から西のほうを見ると木が生い茂った丘陵が見えます。この堅田丘陵は古琵琶湖層が隆

第２図　小さな石材も湖東流紋岩が使われている彦根藩火薬庫

起してできた丘陵です。つまり、かつての湖の底だったところです。この丘陵の尾根には古墳がたくさん築かれています。「春日山古墳群」という古墳で、200基ほどの古墳が確認されています。今は、崩れたものが多く木も生い茂り、山の中を歩き回ってもそう簡単に古墳を見つけることはできません。ただし、この古墳群に限って簡単に見つける方法があります。その方法は「ある石を見つける」なのです。足元に注意してある石を見つけるのです。ある石とは、そう湖東流紋岩です。湖東流紋岩を見つけたならば、その近くに古墳があるはずです。

堅田の古琵琶湖層は粘土と砂の層で大きな石を含んだ層はありません。このため本来大きな石を産出しないのです。この丘陵で古墳の石室を造るためには他所から石を運び込まなければなりません。そして春日山丘陵の古墳の石室を築くために運ばれた石が湖東流紋岩なのです。ですから、見つけた湖東流紋岩はたとえ小さな石でも古墳の石室の一部である可能性が高いのです。周辺の藪をのぞくとそこには大きな石室が顔をのぞかせているに違いありません。

1999年、その春日山古墳群の発掘調査をおこないました。対象となった古墳は調査前は墳丘の形が崩れて、古墳かどうかも判定しにくいものでした。そして、なによりも証拠となる湖東流紋岩が周辺にまったく見



第３図　堅田に運ばれた湖東流紋岩

第４図　採掘で上半部の石材が無くなった春日山G－５号古墳

当たらなかったのです。調査を進めていくと、古墳の中央部が盗掘で大きく掘り崩されていることがわかりました。古墳は中に収められている金品を目当てに盗掘されているものが多いのですが、この古墳も盗掘されたものだったのです。

ところが、この古墳は盗掘されているにもかかわらず、石室の中から当時の埋葬品が無傷のまま次々と出てきました。水晶や硬玉の飾り玉や太刀が当時の状況のまま出てきたのです。盗掘の目的は石室の中の金品ではなかったのです。その目的は石材、つまり「湖東流紋岩」だったのです。古墳を築くために石を運び込んでこなければならない堅田丘陵は、家を築くための石材などもまた不足していたのです。家の基礎などにするため、石室の石を採掘していたのです。

堅田丘陵は湖西に位置します。湖東流紋岩は背後の比良山や比叡山にはありません。今から約1,500年前、古墳の石室を築くための大きな石は琵琶湖を渡って運び込んでいたのです。200基を数える古墳群を築くのに約8000ｔの石が運ばれたものと推定されています。石材は沖島や長命寺のものに良く似ています。おそらくこれらの湖岸から運び込まれたものと考えられます。

堅田丘陵は谷にも湖東流紋岩をいくつか見ることができます。古墳は谷の中にはほとんど築かれませんので、これは古墳ではありません。大きな石なのですが、これらの石は古墳を築くために運ばれた石が捨て置かれたものと考えられます。田んぼの中に大きな石がぽつんと置かれているのが今も見ることができます。

春日山古墳群とは真野川を挟んで北側にあたるところに曼荼羅山古墳群と呼ばれる古墳群があります。春日山古墳群とは直線距離で２㎞ほどしか離れていない古墳なのですが、この古墳群の石室には花崗岩が使われています。近接する古墳群でも、その古墳を築いた過程や、古墳を築いた豪族の経済基盤、交易力、水運力などに大きな違いを見ることができます。

また、春日山古墳群の南東の近接地には、後に衣川廃寺と呼んでいる飛鳥時代の寺院跡があります。近くの有力な豪族が造営した氏寺と考えられている寺院の跡です。古墳を築いてきた有力者が７世紀になり寺院を造営したものと考えられています。お寺を造営するのにも礎石などに大きな石材をたくさん必要としますが、この寺に用いられた石材は花崗岩なのです。古墳を築いてきた湖東流紋岩とは異なります。寺院を建立した氏族は古墳を築いてきた豪族とは違う有力者だったのでしょうか。

湖東流紋岩は普通に見られる石ですが、その使われ方からいろいろな歴史を見ることができる石でもあります。

（財団法人滋賀県文化財保護協会　横田洋三）